

# 結果構文の統語的一考察

## —小節構造と素性継承—

### Resultatives, Small Clause and Feature Transmission

藤 森 千 博

Chihiro FUJIMORI

キーワード：結果構文、小節構造、素性継承、目的語繰り上げ

#### 0. Introduction

本稿では、英語の結果構文 (resultative construction、以下 resultative) の統語構造およびその派生について考察する。Resultative に関してはこれまで多くの研究が行われ、その統語構造に関しても様々な提案がなされてきたが、その構造は大きく分けて (i) 三又枝分かれ構造 (ternary branching, Carrier and Randall 1992) と、(ii) 小節構造 (small clause, Hoekstra 1988) の2つに分類される。

- (i) a. Ternary branching structure  
[<sub>VP</sub> V DP XP]            XP=result phrase
- b. Small clause structure  
      [<sub>VP</sub> V [<sub>SC</sub> DP XP]        SC=small clause

Ternary branching による分析では post-verbal DP や結果句 (result phrase) が V に選択されていることを捉えようとしている一方、small clause による分析では post-verbal DP と result phrase の叙述関係を捉えようとしている。しかし binary branching による分析は他動詞 (transitive) に基づいているのに対し、small clause による分析は自動詞 (正確には非能格動詞、unergative) に基づいているという論拠の違いがあり、それゆえ後述するように論拠となる中心的事象から外れる部分に対してそれぞれ特別な但し書きや操作を仮定しなければならないという点で一長一短であり、事実 Levin and Rappaport 1995 は transitive を基にした resultative には ternary branching を、unergative を基にした resultative には small clause を仮定して2つの分析の折衷案を提示している。しかし、resultative というひとつの現象に対して動詞の自他の区別が構造の違いを生むというのは言語習得の点において大きな負担となるため、動詞の自他の区別なく統一的な構造が仮定されることが望ましい。Lasnik and Saito 1991 をはじめとして、例外的格付与構文 (ECM) において ECM subject が顕在的目的語移動 (raising to object, RTO) しているという議論が盛んに行われており、もしこの議論が small clause の分析にもあてはまるとすれば、small clause の“主語”が顕在的に目的語位置まで移動することになる。事実、後述するように、Hong and Lasnik 2010 では small clause subject の繰り上げ (RTO) を支持する議論がなされている。この議論が正しければ、resultative に対して small clause を仮定することは ECM subject が主節動詞の目的語として機能する議論と並行的になり、したがって small clause による分析は、少なくとも Hoekstra 1988 が提案するような特殊な操作を仮定しなくても説明できることになり、その妥当性は飛躍的に向上する。さらに、ミニマリストプログラムに基づく言語分析では併合 (Merge) による構造の組み立てが仮定されており、ある要素  $\alpha$  と  $\beta$  が Merge することによってのみ統語構造が構築されるということは、

C&R 1992が提案するような binary branchingは存在し得ないことになる。したがって、動詞の自他の区別にかかわりなく resultative に対して small clause を仮定することが唯一残された道であると思われる。

以上を踏まえ、本稿では、resultative に対して small clause を仮定する分析を支持する。具体的には、まず第1章で resultative construction の特性を概観した後、Tomizawa 2007による unergative-based resultative についての議論とその主張を概観し問題点を指摘する。第2章ではその問題点を克服すべく、Takeuchi 2010による日本語の ECM の分析を基に resultative における small clause の素性照合のメカニズムやそれに伴う移動のあり方を提案する。第3章では Boas 2003による small clause 分析への批判に答えることで small clause による分析の妥当性をさらに論証する。第4章では本稿のまとめを示す。

## 1. The Structure of Resultatives

### 1.1. Properties of Post-verbal DP in resultatives

英語の resultative でひと際興味深いのは、以下に示すように、unergative がその直後に一見すると目的語のように思える DP (fake object) を取るところにある。

- (1) Dora shouted *herself* hoarse

しかしこの *herself* は unergative の項 (argument) ではない。

- (2) \*Dora shouted *herself*

fake object のひとつの特徴として、fake object は再帰代名詞として現れ、主節主語をその先行詞として指示する。再帰代名詞の照応関係は束縛条件 A (Condition (A)) によって説明される。

- (3) binding condition (A)

An anaphor must be locally c-commanded by its antecedent.

- (4) a. John<sub>i</sub> praised himself<sub>i</sub>/\*him<sub>i</sub>  
b. John<sub>i</sub> thinks [that \*himself<sub>i</sub>/he<sub>i</sub> is a genius]

この事実から、(1) において post-verbal DP は主節内において主節主語に locally c-command (=束縛) されることによって照応関係を満たしていると考えられる。

また、post-verbal DP は accusative Case を付与されている。

- (5) The dog barked him/\*he awake

このことから、post-verbal DP が主節内において“目的語”のように振る舞っていることが分かる。

### 1.2. Small Clause Analysis: Tomizawa 2007

Carrier & Randall 1992は、1.1に示した事実を捉えるため、resultative における VP 内を三又構造 (ternary branching) であると仮定している。

- (6) Ternary branching structure (= (ia))  
        $[_{VP} V DP XP]$                       XP=result phrase

(6)の構造ではpost-verbal DPがVP内に生じられることでfake objectが主語によってlocally c-command (=束縛) されることを説明し、さらにDPとresult phraseがmutual c-commandすることによって叙述関係を結んでいることも説明できる。さらにpost-verbal DPとresult phraseがVと姉妹関係にあることによってresult phraseがVに選択されていることも説明している。

これに対しTomizawa 2007は少なくともunergative-based resultativeに関してsmall clauseによる分析を支持する主張を展開している。特に、C&R 1992がternary branchingの根拠とした数々の言語現象に対して、ternary branchingによる分析よりもむしろsmall clauseによる分析によって説明される方が合理的であると主張している。

- (7) process *-ing* nominalization  
     a. \*the jogger craze has resulted in [the running of a lot of pairs of Nikes threadbare]  
     b. [the watering of tulip flat] is a criminal offense in Holland
- (8) middle formation  
     a. \*the baby ticks [[e] awake] easily  
     b. this table wipes [[e] clean] easily
- (9) adjectival passive  
     a. \*a [drunk-dry] teapot  
     b. a [pounded-flat] metal

C&R 1992は(7-9a)について、(7-9b)が文法的であることと区別するために、unergativeのpost-verbal DPはVと姉妹関係にはあるがargumentではないため非文法的となる、と記述するにとどまり、なぜそうなるのかは何も説明していない。一方small clauseによる分析では、post-verbal DPはsmall clauseの主語であってそもそもunergativeのargumentではないため(7-9)の非文法性を正しく判断できる。

一方、一見するとsmall clauseによる分析では説明できないような例もある。

- (10) a. the baby<sub>i</sub> was ticked  $t_i$  awake by the loud clock  
       b. the pavement<sub>i</sub> was run  $t_i$  thin  
       (cf. the table<sub>i</sub> was wiped  $t_i$  clean)

受動化 (passivization) がinternal argumentにかかる操作だとすると、(7-9)で説明したようにunergativeのpost-verbal DPはargumentではないのでpassivizeできないはずだが(10)ではpassivizationが容認されている。これに関してTomizawa 2007は、以下の例文と同様に、small clauseは主節動詞と意味的に関連していることを主張している。

- (11) a. the politician<sub>i</sub> was laughed [<sub>PP</sub> at  $t_i$ ]  
       b. John<sub>i</sub> was considered [<sub>IP</sub>  $t_i$  to be honest]

- (12) \*the politics class was slept [<sub>PP</sub> during *t<sub>i</sub>*]

この分析を基に、Tomizawa 2007 は unergative resultative の small clause は、*consider* や *believe* などのそれとは異なり、補部 (complement) としての完全なステータス (full-fledged status) を持っていないと仮定している。(ここで言う“不完全さ”とは、*consider* や *believe* などの small clause は主節動詞の意味的な関与が見られないのに対し、resultative の small clause は主節動詞の意味的な関与があるということを示す。3.3 で議論するように、主節動詞に意味的に選択されているという事実は特に result phrase の予測可能性と深く関わっている。)

また、Tomizawa 2007 は C&R 1992 が示している次の例文についても議論している。

- (13) a. ?How threadbare<sub>i</sub> do you wonder [whether they should run their Nikes *t<sub>i</sub>*]  
 b. ?How hoarse<sub>i</sub> do you wonder [whether they sang themselves *t<sub>i</sub>*]  
 (cf. ?How flat<sub>i</sub> do you wonder [whether they hammered the metal *t<sub>i</sub>*])
- (14) a. \*How stupid<sub>i</sub> do you wonder [whether Bill considers Pete *t<sub>i</sub>*]  
 b. \*How angry<sub>i</sub> do you wonder [whether he<sub>j</sub> became *t<sub>j</sub>* *t<sub>i</sub>*]

(13) では *wh*-island からの抜き出しが弱い非文法性しか示さないのに対し、(14) では同じ抜き出しが強い非文法性を示している。この文法性の差について、C&R 1992 は (13) では抜き出された result phrase が argument であるのに対して (14) では抜き出された phrase が non-argument であるため、空範疇原理 (ECP) によって排除できるとしている。しかしミニマリストプログラムに基づく分析では ECP に頼らない説明を施す必要がある。そこで Tomizawa 2007 は Rizzi 1990 で議論されている指示性 (Referentiality) による説明を試みている。Rizzi 1990 は referential element のみが *wh*-island から抜き出るとしている。その際、referentiality は  $\phi$  素性の一致にとって重要な役割を果たしていると指摘している。つまり、Tomizawa 2007 は、 $\phi$  素性の一致には referentiality が求められると仮定している。

- (15) a. \*[50 pounds]<sub>i</sub> will be weighed *t<sub>i</sub>* by Mary  
 b. \*I regret that [for us to smoke] bothers her so much

(15) では、[ ] で示された主語が non-referential であるため T の  $\phi$  素性を照合できない。また、以下の構造において XP が  $\phi$  素性を照合するとその内部から抜き出しができなくなる (GB 理論による分析では主語条件 (subject condition) と呼ばれていた現象)。そのとき、同時に YP を抜き出すことが容易になるとしている。

- (16) [<sub>FP</sub> XP [<sub>F</sub> F [ $\phi$ ] YP]]

- (17) ? ..... and [win the race]<sub>i</sub> I wonder whether he did *t<sub>i</sub>*

(17) のような抜き出しを説明するため、Tomizawa 2007 は (16) において F の  $\phi$  素性が照合されると YP が referential になると仮定している。

以上の議論を基に (13) に戻ると、resultative の small clause では“主語”と HeadSmallClause が  $\phi$  素性を照合しており、その結果 result phrase が referential になり抜き出しが可能になる。つまり、この small clause の“主語”は主節動詞の complement というよりまさに「主語」であると考えることができる。

Tomizawa 2007はさらに以下の例文についても議論している。

- (18) a. the Nikes<sub>i</sub> (that) I ran [<sub>DP</sub> the soles of *t<sub>i</sub>*] threadbare  
 b. the film<sub>i</sub> (that) the producer talked [<sub>DP</sub> the cast of *t<sub>i</sub>*] to death  
 (cf. the door (that) I painted [<sub>DP</sub> the back of *t<sub>i</sub>*] red)
- (19) a. ??Which subject<sub>i</sub> do you wonder [<sub>DP</sub> a book about *t<sub>i</sub>*] too boring for your class  
 b. \*Who<sub>i</sub> did you believe [<sub>DP</sub> a picture of *t<sub>i</sub>*] to have been selected

(18) ではsmall clauseの“主語”からの抜き出しが可能であるのに対し、(19) では不可能である。この対比について、Tomizawa 2007は、Tomizawa 2003に従い、抜き出しが行われる要素が関連する主要部とSpec-Head agreementの関係にある場合抜き出しが許されないと仮定している。さらに、resultativeのsmall clauseの主要部は不完全な $\phi$ 素性を持っていると仮定し、その結果(18)のように“主語”DP内からの抜き出しが可能になるのに対し、(19)のsmall clauseは完全な $\phi$ 素性を持っているため、“主語”DP内からの抜き出しができないと論じている。

以上、Tomizawa 2007のresultativeに対するsmall clauseによる分析をまとめると以下のようになる。

- (20) a. resultativeのsmall clauseは、一般的なsmall clauseとは異なり、不完全なステータスである。  
 b. resultativeのsmall clauseの“主語”とその主要部は $\phi$ 素性の照合を行っている。  
 c. resultativeのsmall clauseの主要部は不完全な $\phi$ 素性を持っている。

ここで注目すべき点がある。Tomizawa 2007では主にunergative-based resultativeについて上記の分析を提示しているが、(10)(13)(18)のcfに示すようにtransitive-based resultativeでも同様の振る舞いが観察されており、unergative-basedのみならずtransitive-based resultativeにも上記の分析をそのままあてはめることが可能であるように思われる。その際問題となるのは(7-9)で示したpost-verbal DPのargumenthoodに関する相違だが、この点に関してはGoldberg 1995は、そもそも(7-9)はargumenthoodの判別には利用できないと論じている。

- (21) a. \*the shooting of the man dead (nominalization)  
 b. \*Pat kicks black and blue easily (middle)  
 c. \*the washed-shiny-clean face (adjectival passive)
- (22) a. the persuasion of people to new faiths (nominalization)  
 b. \*the persuasion of people to be quiet  
 c. This movie watches easily (middle)  
 d. \*This movie sees easily  
 e. the murdered man (adjectival passive)  
 f. \*the killed man

(21) は(7-9)と異なり非文法的である。従って(7-9)で示した各現象が成立することは必ずしもtransitiveがargumentをとることによって説明されるわけではないことを示している。一方、(22)では動詞によって文法性に差が出ている。これはargumentをとっても必ずしも(7-9)で示した各現象が成立するわけではないことを示している。

従って、transitiveとunergativeのresultativeは統一的に(20)で示された特徴を持つsmall clauseを持っていると考えていいだろう。

### 1.3. Problems

#### 1.3.1. Externally Motivated Raising

ここで、これまでの議論を踏まえつつ(1-5)の議論に戻りたい。small clauseの“主語”は(1)(5)で示される通り主節の“目的語”として具現化される。

- (1) Dora shouted [<sub>small clause</sub> herself hoarse]  
 (5) The dog barked [<sub>small clause</sub> him awake]

この事実を説明するために、Tomizawa 2007はpost-verbal DPが顕在的に主節のSpecvPに移動していると仮定している。

- (23) a. The loud clock ticked every baby<sub>i</sub> awake at his<sub>i</sub>/her<sub>i</sub>/its<sub>i</sub> afternoon nap  
       b. They laughed every applicant<sub>i</sub> out of the room at his<sub>i</sub>/her<sub>i</sub>/its<sub>i</sub> job interview  
 (24) a. The loud clock [<sub>IP</sub> [every baby]<sub>i</sub> v [<sub>VP</sub> ticked [<sub>small clause</sub> t<sub>i</sub> awake]] [at his<sub>i</sub>/her<sub>i</sub>/its<sub>i</sub> afternoon nap]  
       b. They [<sub>IP</sub> [every applicant]<sub>i</sub> v [<sub>VP</sub> laughed [<sub>small clause</sub> t<sub>i</sub> out of the room]] [at his<sub>i</sub>/her<sub>i</sub>/its<sub>i</sub> job interview]

(23)の構造を(24)であると仮定すると、small clauseの“主語”は顕在的に主節のSpecvPに移動することによってanaphorを束縛できるとしている。

Tomizawa 2007はこの移動の動機付けとして、以下のような仮定を提案している。

- (25) Raising to SpecvP takes place only when externally motivated.

ここでTomizawa 2007が仮定しているexternal motivationとは、例えばbound pronounが束縛される必要性であると論じている。

- (26) a. I believe [<sub>IP/TP</sub> everyone not to have arrived yet] (not>every: OK)  
       b. I believe [every defendant]<sub>i</sub> [<sub>IP/TP</sub> t<sub>i</sub> not to be guilty [during his<sub>i</sub> trial] (not>every: \*)

Tomizawa 2007によると、(26a)では*everyone*はSpecvPへ移動する動機付けがなく、IP/TP内にとどまっているためnot>everyの解釈が出る一方、(26b)ではbound pronounを束縛するというexternal motivationによって*every defendant*がSpecvPへ移動しているためnot>everyの解釈が出ない、と説明されている。

この説明によればsmall clauseの“主語”の移動が状況次第(正確にはexternal motivationの有無)で起こったり起こらなかったりすることになるが、(1)(5)ではそのような動機付けは存在しないにもかかわらずpost-verbal DPが“目的語”として振る舞うのかを説明できない。反対に、以下の例文にお



いて *himself* は先行詞に束縛される必要があるが、これが動機付けとなって *himself* が主節に移動しているとは考えられない。

- (27) \*John<sub>i</sub> thinks [himself<sub>i</sub> is a genius] (= (4b))

また、移動は素性照合によってのみ起こるとする一連のミニマリストプログラムに基づく分析からすると、(25) の背景として束縛に関する素性及びその照合を仮定することになるが、束縛に関する素性の存在や、もしそのような素性があるとしても、どのような照合関係を構築すべきかは不明である。

### 1.3.2. The Difference between ECM and Small Clause

さらに、そして最も重大な問題となるのは、Tomizawa 2007 は resultative に small clause を仮定しているにもかかわらず、その分析に例外的格付与構文 (ECM) におけるデータを用いているところにある。もし ECM と small clause が“主語”の繰り上げに関して同じ振る舞いを示すのであれば問題ないが、Hong and Lasnik 2010 が指摘しているように、ECM の“主語”の繰り上げは随意的であるのに対し、small clause の“主語”の繰り上げは義務的であるという決定的な違いが見られる。

- (28) a. They're trying to make John out to be a liar.  
b. They're trying to make out John to be a liar.

- (29) a. They're trying to make John out a liar.  
b. \*They're trying to make out John a liar.

(28) の ECM では“主語” *John* が主節動詞 *make out* に挟まれる (= 顕在的繰り上げ) ことも ((28a)) 移動せずそのままの位置にとどまることも ((28b)) 可能であるのに対し、(29) の small clause では“主語”は必ず *make out* に挟まれなければならない、それは言い換えると“主語”は義務的に顕在的繰り上げしなければならないということになる。

また、H&L 2010 は indefinite の scope fact によっても“主語”の繰り上げの有無を説明している。

- (30) a. I believe someone to have insulted Arthur  
wide scope reading: There is someone who I believe insulted Arthur  
narrow scope reading: I believe that someone insulted Arthur  
b. I believe someone to be guilty (wide / narrow)  
c. I believe someone guilty (wide / \*narrow)

(30a, b) の ECM の“主語” *someone* は wide scope も narrow scope も取れるのに対し、small clause の“主語”は wide scope しか取らない。つまり、ECM の“主語”は顕在的に繰り上げされて scope を取ることも (wide) そのままの位置にとどまって scope を取ることも (narrow) できるのに対し、small clause の“主語”は必ず繰り上げされてそこで scope を取るため wide reading しか出ない。

このように、ECM と small clause では“主語”の繰り上げについて異なる振る舞いを示している。したがって、Tomizawa 2007 が示した ECM を基にした small clause の分析はそれぞれの事実を混同していることになり、結果として誤った帰結を導き出すことになってしまう。

## 2. Optional Feature Transmission in Resultative Small Clauses

### 2.1. ECM Construction and “Raising to Object” in Japanese

この問題に対して興味深い示唆となり得るのは、Takeuchi 2010の日本語におけるECMについての議論である。

- (31) a. Taroo-wa [Yuki-**ga** baka da to] omot-teiru  
 b. Taroo-wa [yuki-**o** baka da to] omot-teiru

Takeuchi 2010 は、Chomsky 2008の素性継承 (Feature Transmission, FT) に基づき、ECMにおいてTPの上にCPがあり、Cが持つ $\phi$ 素性がTに随意的に付与されると仮定している。そこで、まずChomsky 2008のFTについて概観する。(以下の説明はTakeuchi 2010による。)

Chomsky 2008はTの上にCが存在することによってnominative Caseの照合が可能になると論じている。

- (32) a. I expect [him to leave]  
 b. I believe [him to be incompetent]

(32) では埋め込み節の主語はaccusativeとして具現化し、nominativeとしては具現化されない。この事実についてChomsky 2008は、[1] CがTの上に存在し、[2] Tが持つ $\phi$ 素性は元々Cが持っていて、[3] nominative Caseの照合はTが $\phi$ 素性を持っている場合にのみ起こる、と仮定している。この仮定を基に(32)を分析すると、主節動詞はTPをcomplementとして取っており、Cは存在しない。従って埋め込み節のTは埋め込み節の“主語”のCaseを照合できないままであり、より高い位置にある $v$ から $\phi$ 素性を継承されたVによってAgreeされ $\phi$ 素性を照合されるため、結果としてaccusative Caseとして具現化される。

この分析を基に、Takeuchi 2010は(31)に対して以下のような説明を施している。

- (33) a. Taroo-wa [<sub>CP</sub> [<sub>TP</sub> Yuki-**ga** baka da] to] omot-teiru  
 b. Taroo-wa [<sub>CP</sub> Yuki-**o** [<sub>TP</sub> baka da] to] omot-teiru

(33a) ではCが持つ $\phi$ 素性がTに継承され、Tの $\phi$ 素性照合のためYuki-*ga*がSpecTPに移動している一方、(33b) ではCが持つ $\phi$ 素性がTに継承されずCに残ったままになっており、Yuki-*o*はSpecCPに移動することによってその $\phi$ 素性を照合できると論じている。

また、accusative subjectが許される(つまりCの $\phi$ 素性がFTされない)のはCの補文標識が「と」の場合のみであるとしている。

- (34) a. Taroo-wa [Hiromi-**ga** kirei (da) **ka**] siritagat-teiru  
 b. \*Taroo-wa [Hiromi-**o** kirei (da) **ka**] siritagat-teiru

(34b) のECMにおける補文標識は「か」であり、この場合(31b) (32b) とは異なりCが持つ $\phi$ 素性のFTが義務的となるためaccusative subjectは許されない。

この移動を仮定すると、以下の事実を説明できる。



- (34) a. ?John<sub>i</sub>-ga [<sub>CP</sub> [<sub>TP</sub> kare<sub>i</sub>-ga baka da] to] omot-teiru  
 b. \*John<sub>i</sub>-ga [<sub>CP</sub> kare<sub>i</sub>-o [<sub>TP</sub> baka da] to] omot-teiru

(34a) では *John* が *kare* を locally c-command しておらず Condition (B) に従うが、(34b) では *John* が *kare* を locally c-command するため Condition (B) に違反してしまう。

## 2.2. Proposals

本稿では、Tomizawa 2007の small clause による resultative の分析と Takeuchi 2010の日本語の ECM の分析を融合させることによってその統語的振る舞いを以下のように仮定する。

(20b) に示したように、resultative の small clause は  $\phi$  素性の照合を行っている。この事実を Chomsky 2008の提案にあてはめると、small clause の上には C が存在し、small clause 内で照合される  $\phi$  素性を持っていると仮定できる。しかし HeadSmallClause は音形的に具現されることがないという点で defective であるため FT は起こらないと仮定すると、Takeuchi 2010の日本語の ECM における accusative subject の場合と同様に、small clause の“主語”は SpecCP に移動することによってその  $\phi$  素性を照合すると仮定する。

- (35) Dora shouted [<sub>CP</sub> herself<sub>i</sub> C [<sub>small clause</sub> t<sub>i</sub> H<sub>small clause</sub> horase]]  

$$\begin{array}{ccc} [\phi] & [u\phi] & <\text{defective}> \\ \uparrow & \uparrow & \\ & \text{checking} & \end{array}$$

この移動によって“主語”は phase の periphery に達するため、さらに上位にある *v* から visible になる。そして *v* から [ACC] を継承された V (probe) から Agree の goal として解釈され、さらに SpecvP に移動することによって accusative Case を照合すると仮定する。

この一連の移動を仮定することによって、これまで示してきた small clause の“主語”の振る舞いを説明できる。

まず、“主語”は small clause という clausal boundary を越えて移動しているため、主節内の要素として解釈される。そのため、主節主語から適切に locally bind されるため、(1) などで示したように reflexive として出現する。

また、“主語”は small clause を越えて主節内へ移動しているため、H&L 2010が指摘するように主節動詞句内にある anaphor を bind することも Weak Crossover を弱めることも NPI を認可することもできる。

“主語”の Case に関しては、“主語”は V に Agree され、さらに SpecvP に移動することによって照合されるため、(5) などで示したように“主語”は accusative として具現化する。

さらに、HeadSmallClause は defective であるため FT は一貫して起こらず、 $\phi$  素性の照合は“主語”が SpecCP に移動することによってのみ行われる。つまり、この繰り上げは義務的である。したがって、H&L 2010が指摘するような small clause の“主語”の義務的な繰り上げを捉えることができる。

## 3. Arguments against Boas 2003

前節までで見てきたように、本稿では resultative construction に対して small clause を仮定し、small clause の“主語”が義務的に主節の目的語位置まで繰り上げされることを提案した。しかし、

resultativeにsmall clauseを仮定する分析に対しては、様々な反論があることも事実である。特に transitive resultativeにおいて、なぜ通常の場合とは異なり、目的語が目的語位置ではなく、small clauseの“主語”位置に生成されるのかについて、これまでの統語的説明の不備を指摘されることが多い。本節では、Boas 2003において指摘されたHoekstra 1988のresultativeのsmall clauseによる分析への批判に対し、本稿でのこれまでの議論及び提案を基に答えることで、small clauseによる分析の妥当性を論証したい。

### 3.1. Hoekstra's “Detransitivization”

Hoekstra 1988は、resultative constructionに対して、動詞の種類にかかわらず統一的にsmall clauseによる分析を提案している。

- (36) a. Jim danced [<sub>small clause</sub> Mary tired] (unergative)  
 b. He shaved [<sub>small clause</sub> his hair off] (transitive with unspecified object)  
 c. They painted [<sub>small clause</sub> the door green] (transitive)

この際、(36a)のようなtransitiveにおいてsmall clauseを仮定するために、Hoekstra 1988はtransitiveはresultativeでは脱他動化 (detransitivize) すると仮定している。そして、small clauseの“主語”は‘purely pragmatic’に主節動詞の目的語として解釈されるとしている。この分析に対してBoas 2003は、そのようなdetransitivizationが経験的証拠によって証明されないためこの仮定は疑わしく、従ってsmall clauseによる分析は問題であるとしている。

確かにBoas 2003が指摘する通りHoekstra 1988が提案するdetransitivizationは他の現象では見られずresultativeにのみ有効な操作であるという点でその存在自体が疑わしいが、かといってそれが即座にsmall clauseによる分析自体が疑わしいことにはならない。

まず、これまでも見てきたように、post-verbal elementsが構成素 (constituent) を成していることは正しいように思われる。

- (36) a. John painted [<sub>small clause</sub> the door green] (= (36c))  
 b. John painted the door  
 c. \*John painted green  
 d. John painted

(36b)はresult phraseが現れておらず、resultativeとしての解釈は不可能である。また、(36c)はpost-verbal DPが現れておらず非文法的である。また、post-verbal positionに何も現れない(36d)はresultativeとしての解釈は不可能である。つまり、post-verbalにDPとresult phraseが共起した場合にのみresultativeとして解釈できるということであり、言い換えるとこれらの要素がconstituentを成す場合にのみresultativeとして解釈できるということになる。

さらに、(20b)にも示したように、post-verbal elementsは $\phi$ 素性の照合を行っている。この点に関しては、フランス語のresultativeを見るとなお一層明らかである。

- (37) Je la peindrais bleue  
 I-Nom her-Acc paint-ed blue-FEM  
 ‘I painted her blue’

(37) において、post-verbal DP *la* はresult phrase *bleue* と  $\phi$  素性の一致を起こしている。つまり post-verbal elements は  $\phi$  素性の照合が行えるような関係にあるということであり、少なくとも何らかの形で叙述関係にあると言える。そして  $\phi$  素性の照合が Spec-Head configuration で行われるとすると、post-verbal elements もそのような構造を成していることが予測され、従って small clause のようなまとまりを成していると考えることができる。

### 3.2. Selection of Post-Verbal DP

次に Boas 2003 が指摘する small clause による分析の問題点は、Hoekstra 1988 の detransitivization による分析では post-verbal DP の選択を説明できないという点である。Hoekstra 1988 によると、transitive verbs を detransitivize するということは、目的語の選択に関して主節動詞は関与しなくなる（正確には目的語に対して  $\theta$ -role を付与しない）ことを意味し、その代わり post-verbal DP は result phrase から  $\theta$ -role を付与されるとしている。これに対して Boas 2003 は C&R 1992 の議論を基に small clause による分析の不備を指摘している。

- (38) a. \*The bears frightened the campground empty
- b. \*The baby shattered the oatmeal into portions
- c. \*The magician hypnotized the auditorium quiet

(38) は post-verbal DP は result phrase から  $\theta$ -role を付与されてるにもかかわらず非文法的となる。(38) が非文法的であるのは、post-verbal DP が主節動詞によって選択されないことに起因する。つまり、transitive は post-verbal DP を選択している ( $\theta$ -role を付与している) という点であり、Hoekstra 1988 が提案する detransitivization ではこの事実を説明できないため、その操作を基にした small clause による分析は問題であるとしている。

Hoekstra 1988 の分析の前提としてあるのは、主題役割付与に関する  $\theta$  基準 ( $\theta$ -criterion) である。

#### (39) $\theta$ -Criterion (Chomsky 1981)

Each argument bears one and only one theta-role, and each theta-role is assigned to one and only one argument.

(39) の観点からすると、post-verbal DP は result phrase と主節動詞という 2 つの predicate からそれぞれ  $\theta$ -role を付与されることはできないため、Hoekstra 1988 は detransitivize された主節動詞は small clause に、result phrase は post-verbal DP に、それぞれ  $\theta$ -role を付与すると仮定している。確かにこの説明で (38) を排除することは、post-verbal elements が何らかの意味関係を結んでいるように思われるため不可能であるように思われる。

しかし、 $\theta$ -role の付与に関して (39) が機能しないとすれば、つまりひとつの argument が複数の  $\theta$ -role を受け取ることができるのであれば事態は変わってくる。実際、Hornstein 1999 などで論じられているように、 $\theta$ -position への移動を認め、ひとつの argument が複数の  $\theta$ -role を付与されることが可能であるとすれば、Hoekstra 1988 の detransitivization による説明の不備を克服することができ、したがって Boas 2003 が指摘するような問題は生じないことになる。

本稿では small clause の“主語”が主節内へ移動することによって accusative Case を付与されると仮定した。つまり、“主語”は主節内へ移動することによって“目的語”としてのステータスを得ることになる。ここで Hornstein 1999 が主張するようにひとつの argument が複数の  $\theta$ -role を受け取ることがで

きると仮定すると、“主語”はまず small clause の complement である result phrase から  $\theta$ -role を付与され、その後“目的語”と解釈される位置まで繰り上がった後、主節動詞から  $\theta$ -role を付与されると考えれば、(38) における post-verbal DP の選択のミスマッチによる非文法性を説明できる。(38) において主節動詞は detransitivize していない通常の動詞のままであり、付与すべき internal  $\theta$ -role を持っている。post-verbal elements 間（つまり small clause 内）では  $\theta$ -role の付与は問題なく行われたが、主節内へ繰り上がった“主語”は主節動詞が持つ internal  $\theta$ -role とは合致しないため、(38) は非文法的になるのである。

Unergative-based resultative ではどうだろうか。post-verbal DP は result phrase から  $\theta$ -role を付与されており、 $\theta$ -criterion には違反しない。その後主節内へ繰り上げた後 accusative Case を照合されるが、unergative verb は internal  $\theta$ -role を持たないのでそもそも raised DP に対して  $\theta$ -role を付与することはない。つまり、post-verbal DP は Case を照合するためだけに繰り上げするのである。

以上の議論から、“objecthood”とは何か、という本質的な問に対して一定の解答を得られるように思われる。英語では unergative-based resultative の post-verbal DP が accusative を付与されるということからも、Case の照合に関して transitive をプロトタイプとしたシステムが unergative に対しても援用されると考えられる。この点に関しては、Boskovic 2011 の議論が有益である。Boskovic 2011 は Case assigner は必ずしも Case を付与しなくてもよいという点で Boskovic 1997 で提案された Inversed Case Filter は維持されないが、DP が Case を持たなければならないとする Case Filter は維持されなければならないと論じている。つまり、Case Filter の観点からすると unergative-based resultative の post-verbal DP は必ず Case を付与されなければならない。本来 accusative を付与する能力を持たない unergative であっても、Case Filter の要請によって post-verbal DP に Case を付与しなければならないことになり、その際 transitive の Case の付与をプロトタイプとすることは十分予測できる。しかし、主節動詞にとっての“目的語”かどうかは、単に accusative を照合されることだけでなく、主節動詞から internal  $\theta$ -role を付与されるかどうか“objecthood”を決定する重要な要素であるということが、上記の resultative の自他の違いによる移動がもたらす結果の違いによって明らかとなる。

では unergative において accusative Case をどのように照合する应考虑すべきだろうか。この点に関する詳細な議論は今後の研究に委ねるが、*v* という主要部の存在が大きな鍵を握っているのではないかと推察する。transitive の *v* は [+CAUSE] を担う一方、unergative の *v* は [-CAUSE] を担うと考えられるが、resultative のような“特別の事情”により [+CAUSE] を担う *v* が unergative にも現れると考えれば、Spec*v*P において accusative Case を照合できることになるので unergative-based resultative の accusative Case checking を説明できることになる。上記の“特別の事情”とは、具体的には、resultative が持つ意味特性から導くことができる。Levin and Rappaport 1995 や Goldberg 1995、Washio 1997 などが論じているように、resultative とは ‘causative change of state by the activity / eventuality denoted by the verb’ を表す。この causative change of state はまさに [+CAUSE] を担う *v* が存在することによって保証できるものと考えることができる。したがって unergative-based resultative において [+CAUSE] を持つ *v* が現れると仮定することで、なぜ通常の unergative にはできない accusative Case の照合が可能になるのかを説明できると考える。

### 3.3. Selection of Result Phrases

Boas 2003 が指摘する最後の問題は、Hoekstra 1988 が主張するように result phrase が post-verbal DP と叙述関係にあるように思われる場合でも（つまり  $\theta$ -role を付与できる関係にある場合でも）容認されない例が存在するという点である。

- (40) a. John painted the house {green /\*old /\*expensive}  
 b. The joggers ran their Nikes {threadbare /\*purple /\*new}  
 c. The gardener watered the tulips {flat /\*red/\*cheap}

(40) の post-verbal DP と result phrase が small clause を形成しているとする、small clause 内での  $\theta$ -role の付与は問題なく行われていると考えられるが、resultative としての解釈はできない。つまり、small clause 内においてのみ成立する  $\theta$ -role だけでは resultative という事実を説明できないということである。

ここで、Tomizawa 2007 の small clause のステータスに関する議論を思い出してほしい。

- (10) a. the baby<sub>i</sub> was ticked  $t_i$  awake by the loud clock  
 b. the pavement<sub>i</sub> was run  $t_i$  thin  
 (cf. the table<sub>i</sub> was wiped  $t_i$  clean)  
 (11) a. the politician<sub>i</sub> was laughed [<sub>PP</sub> at  $t_i$ ]  
 (12) \*the politics class was slept [<sub>PP</sub> during  $t_i$ ]

(11)における passivization が容認されるのは PP が V によって (何らかの形で) 選択されているからである一方、(12)の passivization が容認されないのは PP が純粋な adjunct であり、adjunct から要素を抜き出すことは adjunct rule に違反するためである、と考えられる。(10)において post-verbal DP が passivize できるということは、(11) 同様、resultative の small clause が V によって (何らかの形で) 選択されていると考えることができる。ここで small clause を選択する要因についての詳細な研究や議論は今後の研究に委ねるが、解決へ向けた糸口を Levin and Rappaport 1995 及び Washio 1997 から読み取ることができる。3.3でも述べたように L&R 1995 は resultative において post-verbal DP は V が表す eventuality によって生じる change of state を受ける、としている。また Washio 1997 は V が本質的に含意する change of state を result phrase で表す場合、その resultative は weak であるとしている。どちらの議論からも、V の動作・行為によってもたらされる結果状態が予測可能であり、そのような予測できる結果状態のみが result phrase として表出することができると考えることができる。これは (11)(12) の PP についても同様の議論が成り立つように思われる。つまり、(11) の PP は V が表す eventuality と深く関与している (つまり V から予測可能である) 一方、(12) の PP は V が表す eventuality とは関与していない (つまり V から予測不可能である) と捉えることができる。もしそうだとすれば、(40) で容認されない result phrase は V (が表す eventuality) から予測可能な結果状態を表していないということになる。

また、Washio 1997 は result state の予測可能性について、動詞が持つ (辞書的) 意味特性に記載された特性が具現化することが予測可能であることと同義であると論じている。

- (41) a. Mary dyed the dress pink  
 b. \*Mary dyed the dress beautiful  
 c. dye: to give a (different) *color* to (something) by means of dying

(41a) の動詞 *dye* は (41c) のような意味特性を持っていると仮定すると、その意味特性に組み込まれている result state である [color] を特定することが result phrase の役割であり、それ以外の result state を表す result phrase (41b) は動詞の意味特性から予測できないため容認できないとしている。この議論が正しければ、result phrase が表す result state は動詞と深く関連しているということになり、result phrase が V から意味的に選択されているということになる。反対に、(41b) のような意味特性



に記載されていない result state はたとえ語用論的（または現実世界的）に解釈可能な特性であっても result phrase として現れることができないと考えることができる。

このように、resultative に現れる result phrase は主節動詞と強い関係を持っていることになり、したがってどのような result state が result phrase として具現するかは予測可能である。しかし上述の通りその予測可能性をどのように統語論に組み込むかははっきりしていない。その点において Boas 2003 が提示した問題は統語論と意味論のインターフェイスの問題として興味深く、動詞が持つ意味特性をどのように統語で具現化するかという問題は今後さらに研究を進めていく必要がある。

#### 4. Conclusion

本稿では英語の resultative construction に対して small clause を仮定する分析を提案し、その詳細なメカニズムについては、Takeuchi 2010 の日本語の ECM に対する分析を small clause に援用し、small clause はその上に  $\phi$  素性を持った C が存在し、C の  $\phi$  素性は HeadSmallClause に Feature Transmission されず C に残るため、その  $\phi$  素性を照合するために small clause の“主語”が SpecCP に移動し、さらに目的格を照合するために SpecvP にまで移動すると仮定した。また、small clause による分析に対する批判として Boas 2003 が挙げた問題点について議論し、(i) post-verbal DP と result phrase の predication relation を捉えるのに small clause を仮定することが妥当であること、(ii) ひとつの DP が複数の  $\theta$ -role を担うことができるという Hornstein 1999 の提案に従えば post-verbal DP が result phrase と主節動詞の両方から  $\theta$ -role を付与されることが可能であること、(iii) result phrase が主節動詞が持つ意味特性から予測可能であること、を指摘し、small clause による resultative construction の分析の妥当性を論証した。

#### References

- Boas, H. 2003. *A constructional approach to resultatives*, CSLI Publications.
- Boskovic, Z. 1997. *The syntax of nonfinite complementation: An economy approach*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Boskovic, Z. to appear. “On valued uninterpretable features,” NELS
- Carrier, J. and J. Randall. 1992. “The argument structure and syntactic structure of resultatives,” *Linguistic Inquiry* 23: 173-207.
- Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, N. 2008. “On phases,” in R. Freidin et al. eds., *Formal issues in linguistic theory: essays of Jeanranger Vergnaud*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Goldberg, A. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Hoekstra, T. 1988. “Small clause results,” *Lingua* 74: 101-139.
- Hong, S. and H. Lasnik. 2010. “A note on ‘Raising to Object’ in small clauses and full clauses,” *Journal of East Asian Linguistics* 19: 275-289.
- Lasnik, H. 1999. “Chains of argument,” In S. Epstein and N. Hornstein eds., *Working Minimalism*, 189-215. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Lasnik, H. and M. Saito. 1991. “On the subject of Infinitives,” In L. M. Dobrin et al. eds., *Papers from the 27th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, Part I: The general session*: 324-343. Chicago Linguistic Society, University of Chicago, Chicago, IL.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the syntax-semantics interface*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Rizzi, L. 1990. *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Takeuchi, H. 2010. “Exceptional case marking in Japanese and optional feature transmission,” *Nanzan Linguistics* 6: 101-128.



- Tanaka, H. 2002. "Raising to object out of CP," *Linguistic Inquiry* 33: 637-652.
- Tomizawa, N. 2007. "Syntactic structures of resultatives revisited," 山形大学人文学部研究年報 第4号、79-100.
- Washio, R. 1997. "Resultatives, compositionality and language variation," *Journal of East Asian Language* 6: 1-49.